

みの
EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

名古屋モザイク工業

Design Award 2020
受賞作品決定!

タイルを使用した施工事例のコンテスト「デザインアワード2020」(主催:名古屋モザイク工業株式会社/岐阜県多治見市の総合タイルメーカー)。

第5回目となる今年は、1月~5月末日というコロナ禍での作品募集となったが、252件(住宅部門170件、非住宅部門82件)の応募が寄せられた。

審査により金賞・銀賞・銅賞・入賞・特別賞が選ばれ、9月18日に同社ウェブサイトにて発表された。



タイルが果たす役割を追求

今回応募作品の中で注目されたテーマは、「サスティナビリティ」「丁寧な暮らし」「職住一体」など時代に寄り添うものでした。今だからこそ大切なものが何かを皆さまが真摯に問う中、私たちタイルという素材が果たす役割に向き合い、ますます進化させる努力を怠ってはいないという思いを強くいたしました。



早田辰比呂氏

(審査員/名古屋モザイク工業株式会社 代表取締役社長)



設計:AIUEO STUDIO 株式会社 代表取締役 佐々木純也 プロジェクト担当 有島 力
施工:株式会社 田名部組 撮影:太田拓実

「ARTESSIMO CALDO」

AIUEO STUDIO 株式会社

テーマ

繋ぐ家

住宅部門

金賞

設計者コメント

東京スカイツリーを間近に臨む敷地に建つ集合住宅。敷地の周辺には比較的築年数の古い建物が立ち並んでおり、スカイツリー周りの近代的な雰囲気とのコントラストが色濃い印象を持った。そこで、本建物ではファサードに木を採用し近隣の境界に温かみを持たせ、エントランスでは柔らかい色のタイルを採用することで、建物としての存在感を持ちつつ、対比のはっきりした2つの周辺環境の要素を柔らかに繋げることをテーマとした。

「ガナエ洋菓子舗」

株式会社 saw design office

テーマ

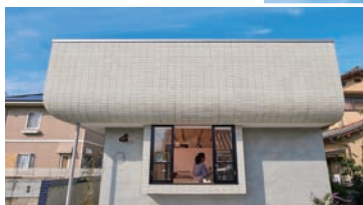
小さな美術館のようなお菓子屋さん

非住宅部門

金賞

設計者コメント

大通りから一つ入った閑静な住宅街にある小さな洋菓子店。目の前には田んぼが広がる。そんな住宅街に馴染むようなやさしい形をタイルでデザインしました。目立たないけれど「あれ、なんだ?」と振り返ってくれるような佇まい。やさしい色合いのタイルがとてもマッチしていると思います。アールの部分は取り合いが難しく、職人さんもちかなり苦労されていましたが、本当に素晴らしい仕上がりになりました。



設計:株式会社 saw design office 施工:株式会社 真聖建設
撮影:アセムスタジオ 白湯 禎

「1 Livingの家」

茂木哲建築設計事務所

テーマ

1つの大きなリビング、浴室も1つのリビング



設計: 茂木哲建築設計事務所 茂木 哲
撮影: 山内紀人

住宅部門

銀賞

設計者コメント

築40年の庭付き団地をリノベーション。庭を部屋のどこからでも眺められ、全体が1つのリビングとなるプランを採用。浴室には唯一の間仕切りとして、タイルで仕上げた腰壁があります。この腰壁は水仕舞いができるとともに、和室の設えとして繊細な表情を持つタイルが必要でした。



設計監理: 久保秀朗+都島有美 久保都島建築設計事務所
撮影: Koji Fujii Nacasa & Partners Inc.

「両国湯屋 江戸遊」

株式会社 久保都島建築設計事務所

テーマ

北斎の描いた、漂う雲の合間に浮かぶような浴場

設計者コメント

両国の北斎通りに面する温浴施設「江戸遊」の増築・改築プロジェクト。葛飾北斎ゆかりの地で江戸をテーマにした都市型スーパー銭湯です。場所ごとに様々な種類のタイルを用いた新館の女性風呂は、北斎の描いた浮世絵「凱風快晴」の雲が浴場全体に広がっていき、漂う雲の合間にいるようなイメージのデザインを考えました。

非住宅部門

銀賞



設計: Small Design Studio 施工: 株式会社 沢井工務店
撮影: 斎藤由美

「菊名の家」

Small Design Studio

テーマ

距離感と質感

住宅部門

銅賞

設計者コメント

54.14㎡の小さなマンションに4人暮らしの家。小さいからこそ、現れてくる質感や生活のぬくもり。どこにでもある家族の風景が、望遠鏡で覗いた様に大きく拡大され、その小さな空間を引き延ばすように配置されたキッチンとその壁に日常の営みが映し出される映画の様に計画した。

「スタージュエリー 渋谷スクランブルスクエア店」

株式会社丹青社

テーマ

CRAFTSMANSHIP ～クラフトマンの精神～

非住宅部門

銅賞

設計者コメント

1946年、横浜・元町に創業した「スタージュエリー」のリブランディングプロジェクト第一段。店内中央には、新たな「象徴」となるメイン仕物を計画。大きな石を削り出すように多面体でシルエットを構成し、表面を磨き上げた石の表情を持たせ、そこはかとなく「人の手による彫刻」を思わせる造形美を生み出した。



撮影: 鈴木賢一

*設計者コメント、審査員の総評は要約して掲載。
その全文、および入賞、特別賞作品は名古屋モザイク工業ウェブサイトに掲載。

<https://www.nagoya-mosaic.co.jp/designaward/2020.html>

回を重ねるごとに上がる、作品のクオリティ

受賞作品で注目した点や、応募作品全体を通して感じたことについて、各審査員がコメントを寄せた。

芸術性、意外性、審美性、清潔感

今年の受賞作品は、大きく4つのカテゴリーに分類できます。一つ目は、芸術的な絵柄の表現法としてモザイクタイルが生み出す楽しげな効果と色鮮やかな活気です。「両国湯屋 江戸遊」に、巧みな職人技への畏敬の念を抱き、「海沿いベンチ」(非住宅部門・入賞)に、心が躍動するような喜びを感じるに違いないでしょう。二つ目は、予想外の珍しい状況でスマートにモザイクタイルを使用した作品です。クッキーのように親しみある丸みを帯びた屋根のフォルムがスリムなタイルによって象られた「ガナエ洋菓子舗」や、「リビングルームには浴室が配置されない」という既成概念を覆すかのように、セラミックタイルが住空間に完璧に溶け込んだ「1 Livingの家」が挙げられるでしょう。三つ目は、「ARTESSIMO CALDO」のエントランスホールや「菊名の家」のキッチンに見られるような、審美的で心地よく、気分を高めてくれる手法でタイルが使われた作品です。最後は、公共空間を形成する上で今後重要な要素になるであろう「清潔さ」が見られた作品です。「PICTORU みたかクリニック」(非住宅部門・入賞)や「TOUCH TO GO 高輪ゲートウェイ駅」(同部門・特別賞)のような作品は、審美面だけでなく、長期的なサステナビリティを表現する好例として、タイルの多様な使い方に注目が集まりました。



審査員長
アストリッド・クライン 氏
(建築家)

小さくとも光るアイデア

私にとって、タイルのデザインの面白さは、プロジェクトのスケールなどがほとんど意味を持たないことだ。小さなものであっても、誰にも思いつかないアイデアや空気感が生み出されていれば、宝石のように輝いて見える。「1 Livingの家」は、家の内装でも、浴室に注目したもの。一見ささやかに見えるがプランは大胆。リビングと直接繋がった浴室である。そのプランが決して不自然に見えないのは、この浴室がユニットバスではなく、丁寧なタイル仕上げだからだ。「菊名の家」は、タイルを背景として使い、様々な要素が雑多に見えがちなキッチンを、そうした他所まで含めて美しい風景としている。この2点は小さいながら、個人が自分の住まいを丁寧に作ってゆく時代を切り開くものだと感じた。「ガナエ洋菓子舗」は、特徴的な丸いシルエットのパラペットに、細いタイルを丁寧に貼るアイデアで、可愛らしくも品の良い雰囲気を作り出している。こうした小さくとも光るアイデアは、現代においては、個人の共感をベースとして、いつの間にか日本中に伝播してゆくものではないかと思う。



猪熊 純 氏
(建築家)

「職住一体」「小商い」「コミュニティー拠点」

審査会にお呼びいただき4年目。回を重ねるごとに応募作品のクオリティが上がっている。コロナ禍で空間デザインを取り巻く状況も一変してしまった。今後、設計者の方々は、「職住一体」「小商い」「コミュニティー拠点」といった要素を持つ空間の設計を依頼されるようになるだろう。その観点からすると、「甲賀の家」(住宅部門・入賞)が参考になる。住宅の1階で将来小さな喫茶店を営むことを想定しているため、住宅に商業空間の要素が入ってきており、そこをうまくタイルでデザインしている。また、「1 Livingの家」や「菊名の家」のように、住空間を見直し、より快適で幸せな暮らし方を求めて改装していく動きも生まれそうだ。次のアワードでは、「職住一体」「小商い」といった性格を持つ空間において、タイルが持つ演出性、耐久性、メンテナンス性を引き出した提案を楽しみにしたい。



塩田健一 氏
(月刊『商店建築』編集長)



Nagoya mosaic-tile
Design Award 2020



学校のような雰囲気ビルの1階という、「toolboxらしさ」が感じられる空間。ショールームには約1000点の商品を展示。扱うものは多種多様なが、共通のセンスが感じられる。



素材本来の魅力を大切にして つくりあげる空間 toolboxのタイル使用術

家づくりやリノベーションの素材を扱うウェブショップ、toolbox。壁紙などの内装建材、ドアノブなどのパーツ、建具や家具まで、扱う商品は268シリーズ。その中には、多種多様なタイルも含まれている。昨年10月に東京都新宿区にオープンしたショールームに伺い、タイルの選び方などをお聞きした。



窓際にはキッチン設備が展示されており、その壁にタイルが張られている。

toolboxは、不動産を扱うウェブサイト「東京R不動産」の兄弟サイト。レトロな集合住宅や昭和の日本家屋など、個性的で味わい深い雰囲気をもつ不動産物件を扱うなかで「自分の空間を自分でつくりたい」との要望が寄せられ、それに応える形で誕生した。内装建材や家具パーツ、住宅設備の販売だけでなく、DIYサポートも行なう。

ショールームは目白駅（JR山手線）から徒歩8分ほど。大通りから一步入った場所に建つ、ビルの一階にある。大きな窓から日差しが入る開放的な空間に、多種多様な素材が並ぶ。窓際の壁にはキッチン設備が展示され、壁に数種のタイルが張られている。

自分がほしいと思ったものを商品に

ショールームを訪れるのは、家づくりを人任せにせず、自分で心地よい空間をつくりあげたいという人たち。「皆さん、写真をたくさん集めていて、『ここはこうしたい』と具体的なイメージをお持ちです。それで一つひとつの素材を自分で選んでいます。そのほうが家づくりは楽しそうですね」と広報を担当する梅川紗季さん。

キッチンの壁にはキッチンパネルを使うことが多いが、toolboxではタイルが選ばれることも多いという。toolboxで扱うタイルは14シリーズ、133の商品。数多ある中から、どうやって選んだのかが気になるところだが、「基本的にスタッフがほしい

と思ったもの、現場で使ったことがあるものを販売しています」と、基準はとてもシンプルだ。

ふとtoolboxのサイトに掲載されている「商品コラム」が思い浮かぶ。一部を抜き出してみるとー

「温かみのある白～茶色にかけての色味の中で表現された布目模様のタイルたちは、和と言われれば和な世界観なのですが、リサ・ラーソンなど北欧の陶器のオブジェの世界観に似合いそうな表情をしています」（古窯70角タイルを紹介するコラムより）。

文章が具体的かつ表現豊かなのは、スタッフの実感がこもっているから。「リサ・ラーソン」と聞いて再びタイルに目を向けると、北欧テイストが感じられてくる不思議！

もしくはtoolboxのものづくりへの思い―「木は木らしく、金属は金属らしく。素材本来の魅力を大切に、経年変化と共に、愛着を育みながら長く付き合っていける商品づくりを行っています」―に合致しているということだろう。



広報担当の梅川紗季さん。
可愛いらしいものより、
渋めのタイルが好みだそう。



事例写真でイメージを伝える

サイトでは施工事例の写真も数多く紹介している。昨年一番人気があったタイルは、事例写真がそのきっかけというから、影響力は大きい。

「建材の中でも、とくにタイルは実際にどんな空間になるのかがイメージしづらいですね。小さなタイル一枚と、それを広い空間に張った場合とでは印象がまったく違います。私たちがよいと思った事例を提供し、空間のイメージを伝えられればと思っています」。

ちなみに目地材についても、ショールームの展示や事例写真と同じものを選ぶ人も多いという。

「タイルは目地の色によってもかなり印象が違いますよね。お客さまからも『この目地は何色ですか』『どこのメーカーの目地材ですか』とよく質問されます」。

中には自分で色の粉を混ぜて、好みの色をつくりあげる人もいそうで、「さすが!」の一言。



見本パネルでは、それぞれ目地材も変えている。このパネルをショールームのキッチン空間に合わせてみてタイルを選ぶ人も。



ずらりと並ぶタオル掛け。素材は鉄、真鍮、ステンレス製を揃える。太さは2種類、長さはオーダーも可能。

toolboxショールーム

東京都新宿区下落合3-14-16

営業時間：火～土曜：13:00～17:00

日・月曜・祝日休み ※現在は予約制、zoomでの相談も受付。



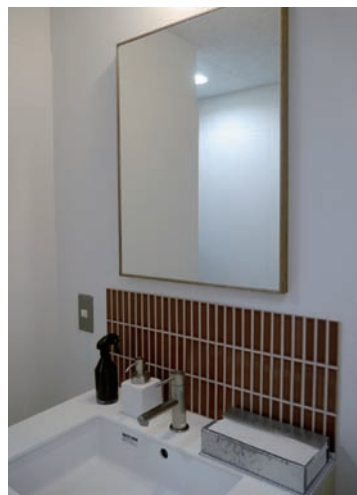
近々発売予定のセットアップの商品。壁の白いモザイクタイルも新しく商品として扱う予定。

タイル、もっと増えます

新しいタイルを扱う予定についてお聞きした。

「近々、セットアップの商品を販売します。レンジフードから、壁の仕上げ、タオルかけまで、キッチン空間の素材をすべてセットにしているものです。その壁で使っているタイルを商品として入れる予定です」と嬉しい返事。撮影用に組んだその商品を見せてもらって、黒色の目地が15角の白いモザイクタイルを引き立て、「これが目地の力!」と納得させられた。

「タイルに関しては商品がまだ少ないと思っているので、今後も増えると思います」と梅川さん。toolboxのセンスで、タイルの新たな魅力が引き出されるのが楽しみだ。



「水彩タイル」は3種類ある形の中からボーダーを使用。色は9色あり、鏡の木枠との相性で選択。

DIYの方法も
詳しく説明!

ショールームを訪れる人からはタイルの張り方を聞かれることも多いという。「新築が完成してから、洗面所の一部に自分で張るという方もいますね」(梅川さん)。

ショールームでは手順を説明するパネルを用意。また、サイトではDIY初心者スタッフがショールームのトイレにタイルを張る様子を紹介。墨だしや養生から、接着剤を塗る、タイルを張る、目地材をつめる……と順を追って詳しく説明。失敗から得たアドバイスもあってかなり役に立ちそう。

「タイルを使ってこんな空間ができました！」

事例写真紹介

自分が選んだ素材で素敵な空間ができれば、思わず見せたいくなるもの。
完成後の写真をお客さまが送ってくれることも多々あるとか。
タイルを使った事例写真を紹介していただいた。

人気のタイル!



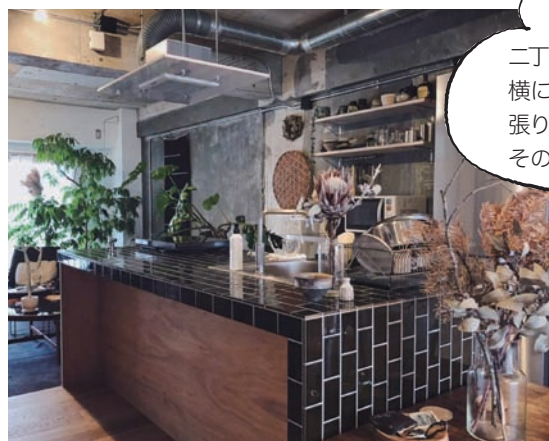
昨年かなり人気があった「古窯70角タイル」。
カタログに載せている事例写真を見て
『こうしたいです!』と選ぶ方が多かったそう。
事例の力は絶大!



六角形の形から蜂の巣をイメージして名付けられた
「ハニカムタイル」は、食器棚の天板に。商品コラムでは、
「渋めカラーの釉薬は、和室を改装した空間なん
かにも良く似合います」とのコメントが。



最近人気のある「水彩タイル」は水彩画のような淡い色あ
いが特徴。小さなスペースに張って空間のアクセントに。
DIYでショールームのトイレに張られたものこちら。



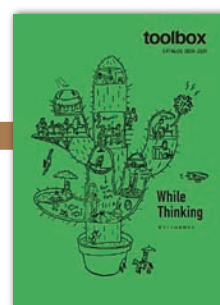
二丁掛けタイルを、縦に張るか、
横に張るか、互い違いに張るか。
張り方で雰囲気が変わるので、
その辺で迷う方もいますね。
(梅川さん)



Photo: Arts&Crafts

「レトロエイジタイル」は、商品コラムで「1950～70年代、いわゆ
る高度経済成長期に建てられた、古いレトロビルや駅で使われて
いるような、釉薬たっぷり、艶の中に深い色合いのあるタイルた
ち」と紹介。キッチンカウンターを覆うように張って印象的な空間
に(右)。リノベーションされた築50年を越えるビルのトイレの壁
に。床のブルーグリーンとのコントラストが鮮やか(左)。

10月に発刊したての2020—2021年
のカタログ。フレームキッチンや洗面台
の紹介ページの事例写真でもタイルを
見つけることができる。



『タイル建築探訪』発刊！

月刊誌『タイルの本』における
故・酒井一光氏による連載が一冊の本に

大阪歴史博物館学芸員であり、日本では数少ない建築を専門とする学芸員として、近代建築やタイルの研究に取り組んできた故・酒井一光氏。本書は月刊誌『タイルの本』の連載をまとめた一冊で、氏の業績をしのび『発掘 the OSAKA』*とともに6月に発刊。データの提供などで発刊に協力した、タイルの本・元編集発行人の依田 郁夫さんに発刊への思いを寄稿していただいた。



明治期から現代までの
タイル建築、連載87回分を
全紹介！

『タイル建築探訪』

酒井一光 著

酒井一光遺稿集刊行委員会 編集

青幻舎／3000円＋税

かつて『タイルの本』というタイル専門の月刊誌が元気に毎月発行されていた頃、誌面の中核をなす連載の一つに「タイル建築探訪」と題した記事が、ほぼ毎月掲載されていました。筆者は、大阪歴史博物館学芸員の酒井一光氏。建築史が専門で、とくにタイルに着目した近代名建築発掘の研究に成果を挙げ、そのタイルの美しい建築写真と端正な文章を楽しみにしていた読者も多かったと思います。

ところが『タイルの本』は、2016年9月号(通巻109号)をもって休刊となり、酒井さんの連載は第86回で最終回を迎えることになりました。その後、酒井さんは大病を患い、あっという間に2018年6月に急逝されてしまったのです。

その当時を振りかえると——酒井さんの亡くなられたという訃報が編集仲間から届き、私は、お通夜に伺うことができました。酒井さんは、タイルの本を支えてくれた貴重な研究者であり、タイル業界を盛り上げてくれた、私にとっては盟友のような存在でしたので、あまりにも突然の早逝(享年49歳)は衝撃でした。けれども、天に召される旅立ちの時を見送ることができたのは、幸いでした。

哀悼の想いに包まれたお通夜では、傷心の奥さまが、酒井さんへの深い哀惜の思いを述べ、胸が締め付けられました。その時、私は、酒井さんとの惜別に花を手向けたい、何とか「タイル建築探訪」の連載は本にしてタイルや建築に関心のある方々のお手元に届けられ

ないか、と強い思いにかられました。そんな共感の輪が広がったのか、2019年に建築関係の学者や研究者、さらに大阪歴史博物館の関係各位により「酒井一光遺稿集刊行委員会」が結成され、全国タイル業協会の支援を受け、また、クラウドファンディングによって資金を募り、このほど表記の単行本、および『発掘 the OSAKA』が京都の青幻舎という出版社から発刊される運びとなりました。

こうして酒井さんの貴重なお仕事が遺稿集として本にまとめられるのは、天におられる本人にとっても本望だろうと、心の中で私は祝福の想いを噛みしめています。とくに建築を彩る「タイル」を導きの糸として近代名建築を渉猟するというフィールドワークは、酒井さん以前の建築史分野では見られなかった新鮮なテーマ設定ではなかったでしょうか。

東京大学大学院建築学専攻で、建築探偵としてよく知られる藤森照信先生にも学んだという酒井さんは、おそらくそこでの学びと経験を積み重ねることで、「タイル建築探訪」というライフワークを掌中のものとしていったのだらうと思います。ちなみに、この命名は連載開始時に酒井さんと話しているなかで自然と決まりました。

この機会にぜひ、読んでいただけたら幸いです。

(『タイルの本』元編集発行人 依田 郁夫)

『発掘 the OSAKA』(青幻舎)は、雑誌『大阪人』での連載をまとめたもので、大阪の近代建築を紹介。